

14 島根県雲南市 中山間地域における若者支援プラットフォームづくり

What ▶ #新規産業創出 #起業支援 #移住・関係人口



左から雲南市 政策推進課の鳥谷 健二さん、株式会社 Community Care 代表取締役の中澤 ちひろさん、NPO法人おっちラボ 代表理事の小俣 健三郎さん。株式会社 Community Care (通称コミケア) が本社を置く「みとや世代間交流施設ほほ笑み」前で。

お話を伺った方々

地域再生マネージャー

NPO法人 農家のこせがれネットワーク
理事(当時)
しるみ けい
銀鏡 佳さん

行政

雲南市 政策推進課
とや けんじ
鳥谷 健二さん

民間

NPO法人 おっちラボ 代表理事
おまた けんざぶろう
小俣 健三郎さん
株式会社 Community Care
代表取締役
なかざわ
中澤 ちひろさん

中山間地域ならではの若手人材育成モデルを

6 町村が合併して雲南市ができたのは 2004 年 11 月。以来、住民主導の地域づくりを目指し、多くのコミュニティが組織されてきたが、圧倒的に少なかったのが 20 代・30 代。中山間地域の課題解決に取り組む若手人材の育成にも着手していたが、行政だけではとても担いきれない。そこで民間の実践知を取り入れた自走できる仕組みづくりに乗り出した。

課題

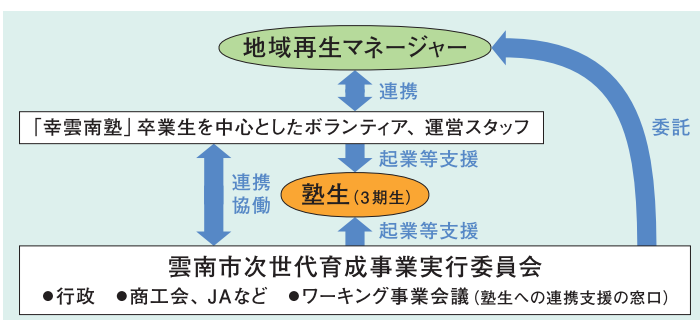
雲南市は島根県東部の中山間地域に位置する人口 3 万 4,000 人ほどの自治体。少子高齢化が深刻化する中、市では以前から地域活性化の取り組みが盛んだったが、担い手の中心は高齢層だった。そこで若い人材を発掘・育成するべく、市は 2011 年度に地域プロデューサー養成講座と銘打った「幸雲南塾」を立ち上げ、2 年間で塾生 24 人を輩出。修了生らが連携して地域活動に取り組んでいたものの、さらに継続発展させていく上で行政の直接支援だけでは限界があった。

目的

幅広い職種の若手人材がチームになって地域課題解決に取り組める体制づくりを目指した。そのために幸雲南塾を中心に、社会起業や地域貢献を志す若い人材の発掘・育成をより本格化させ、さらに、多様な人たちが交流し、若者のリクルートの場としても機能する活動拠点を開設。塾生らが主体的に若者や地域住民に関与していく中間支援組織を立ち上げ、中山間地域の地域活性化のモデルとなるような、自立的・持続的な運営を実現することを目標にした。

地域再生マネージャー事業 実施期間 (2013年度)

事業実施体制



招かれた 3 人の地域再生マネージャーのうち、NPO法人 農家のこせがれネットワーク理事(当時)の銀鏡 佳さんは、雲南市に移住して「幸雲南塾」の進行管理や中間支援組織の設立に尽力。市を中心とした「雲南市次世代育成事業実行委員会」が元塾生らと連携して塾の運営を支援したほか、事業実施期間中に参加した塾生 (3 期生) の起業にも地域再生マネージャーと共に伴走した。

事業実施内容

●若者の交流とチャレンジを支援

What — 何をしたのか？

若者のチャレンジをより引き出せるよう幸雲南塾の形態を見直したほか、交流会などを開催した。

How — どのようにしたのか？

●幸雲南塾の在り方を再構築

幸雲南塾はすでに2期（2年）開催されていたが、当初は「地域プロデューサー」の養成を掲げ、塾生らがプランを発表し、意見し合う形で進められていた。しかし、事業実施期間中の3期（2013年度）からはコミュニティ組織へのヒアリング調査を実施。より実践的・具体的な取り組みへと移行した。6月から11月に講座が5回、最終発表会が1回開催され、11人が参加した。「市外から来ている塾生が半数を占め、もともと地域に30ほどあるコミュニティ組織との関係づくりに苦労しました。外から来た若者が良いことをしているような顔をしてヒアリングしようとしても、簡単には信用してくれない。話に応じてくれたとしても、なかなか本音は語りません。私たち市役所メンバーもできるだけ事前に根回しして、問題が起きたときはお詫び行脚しましたね。それが市の役割だと、当時の上司によく言われましたよ」（鳥谷さん）

●交流会や視察の実施

若者の交流の輪をさらに広げるための交流イベントを積極的に開催。「うなん若者会議」では市内の高校生、大学生、社会人の若者約80人が集まり、「食」「アート」「教育医療」の3つのテーマで自分たちが取り組んでみたいことを語り合った。また、先進的な事例を展開している自治体への視察を、時には塾生らも連れて積極的に実施した。「教育領域で島留学というユニークな制度を導入し成功している島根県海士町^{あまちょう}、『創造的過疎』を掲げてクリエイティブな人材を積極的に受け入れている徳島県神山町^{かみやまちょう}などを訪ねました。他の地域の取り組みを知り、多くの学びを得ると同時に、コミュニティ組織の活動が根付いている雲南市の強みも再認識することができました」（鳥谷さん）

●若者の活動拠点を開設

What — 何をしたのか？

市内のJR出雲大東駅^{いずもだいとう}の構内に若者の活動拠点を開設した。

How — どのようにしたのか？

●駅舎内の空きスペースを活用

出雲大東駅は電車が1、2時間に1本しか来ないローカル線の駅で、バイパスが開通したことで利用者も激減していた。店舗移転によって生じていた空きスペースを活動拠点とし、新設した中間支援組織の事務所としても活用。アンテナショップを設置したほか、駅の管理組合の協力によってWi-Fiスポット化。幅広い世代が交流する場となることを目指した。「駅が市の施設だったので活用しやすいという事情もありました。当時の活動拠点は手狭だったこともあり、現在は『三日市ラボ』という名称で市の中心部であるJR木次駅^{きすき}周辺の古民家に移っています」（鳥谷さん）

●中間支援組織の設立

What — 何をしたのか？

任意団体という形態を経て中間支援組織NPO法人おっちラボを設立。以降、市と「おっちラボ」とが連携して人材育成や起業支援に取り組んでいく体制となった。

How — どのようにしたのか？

●NPO法人として申請

幸雲南塾修了生らが中心となって2013年4月から中間支援組織の設立を準備し、7月に任意団体として「おっちラボ」を設立。翌年1月にNPO法人申請をし、4月に認定された。「おっちラボには市が財源を確保して、半公共的な立場で安定的に活動してもらうのが原則。自立運営に切り替えていけるのかどうか、そもそも切り替えていくべきなのかどうかは今後の検討課題です」（鳥谷さん）

●幸雲南塾1期生が代表に就任

「おっちラボ」の代表に就任したのは、幸雲南塾の1期生だった出雲市出身の矢田 明子^{やた あきこ}さん。のちに「コミュニティナーシング（看護職に限定されない人材が地域住民との日常的な交流の中で暮らしや健康のサポートをする仕組み）」の社会実装に取り組む「株式会社 CNC」を設立し、全国的に注目される起業家になる矢田さんの突破力は、本事業が成果を挙げる上での大きな原動力となった。「地域再生マネージャーの銀鏡さんが雲南に移り住み、誰よりも熱意をもって取り組んだことが大きかったです。前代表の矢田は『誰よりも本気の彼女がいつも近くにいたから、おっちラボを続けることができた』と話しています。そうやってバトンが受け継がれてきたことが、60以上の新規事業が生み出されている雲南市の現在に繋がっているんです」（小俣さん）
「市が若手を育成しようといくら声高に掲げても、民間の主体的な動きがなければ実現しなかったでしょうね。地域の人たちも、地元の実働組織が生まれて、次々と新しい仕掛けを手掛けていく様子に、これまでなかった勢いを感じていたと思います。市の立場でも、若い世代がこれだけ頑張っているのだから、自分たちも手を抜けないという気持ちになりました。今の雲南市のチャレンジする文化の源流には、間違いなくおっちラボがあります」（鳥谷さん）

●市が幸雲南塾運営をおっちラボに委託

市は幸雲南塾の運営をおっちラボに委託。以降数年にわたって矢田さんが塾生らに伴走する体制となった。「雲南は本当に人に恵まれたんです。まず民間のビジネスのノウハウを持った人材が必要だと考え、繋がりがあった NPO 法人農家のこせがれネットワークに『なんとか銀鏡さんを貸してほしい』と頼み、来ていただきました。ただ、おっちラボの代表は塾生から出したいと考え、矢田さんにそれこそ拝み倒して着任してもらったんです。とにかく組織の立ち上げ、地域との関係性づくり、塾生の鼓舞といった、組織がちゃんと回りはじめるまでをやってほしいと。銀鏡さんと矢田さんという2人のコンビは本当に強力で、市もいつも彼女たちから叱咤されていました」（鳥谷さん）



(左) 2013年度の幸雲南塾での一幕。(中) 約80人の若者らが交流した「うなん若者会議」の様子。(右) 今では全国的に注目を集める株式会社 CNC 代表取締役でおっちラボ初代表の矢田さん。

主な成果

●雲南に芽吹いた若者の力

最大の成果は NPO 法人おっちラボの設立。2年前に立ち上げた幸雲南塾では事業実施期間中に参加した3期生も含め計35人の修了生を輩出し、矢田さんを筆頭に意欲的なメンバーが集まったことが大きな力になった。雲南市に移り住んだ銀鏡さんに加え、NPO 法人農家のこせがれネットワーク代表の宮治 勇輔^{みやじ ゆうすけ}さん、有限会社エコレッヂ代表の尾野 寛明^{おの ひろあき}さんの計3人の地域再生マネージャーが持つ、全国で活躍する若手人材とのネットワークも塾生などを集める際に大いに生かされた。「事業開始以前に、県内で開催されたビジネスプランコンテストを見に行ったのですが、発表されるビジネスプラン以上に、集まっている若者たちの熱量に魅せられたんです。こういう若者を雲南にも増やしたいと思って始めたのが幸雲南塾でした。雲南市は中山間地域にあり、いわば農耕民たちのまち。外から次々に新しい人を呼んで新陳代謝を高めるより、種を蒔いて、芽吹き、花が咲くまでしっかり育てる方が合っているはずだと当時の上司と話したのをよく覚えています。臆せずものをいう民間の人たち、それを受け入れ支えようとした市側の面々。両方があったからこそ達成できたと思います」（鳥谷さん）



「おっちラボ」ウェブサイトのトップページ。

地域再生マネージャーコメント



PROFILE

ボランティアとしての参加をきっかけにNPO法人農家のこせがれネットワーク(東京都港区)に参画。2009年度から3年間、理事、事務局長を務めた。地域再生マネージャー就任時は雲南市に移住し、勉強会・交流会の企画運営、NPO法人の設立と組織マネジメントなどを手掛けた。

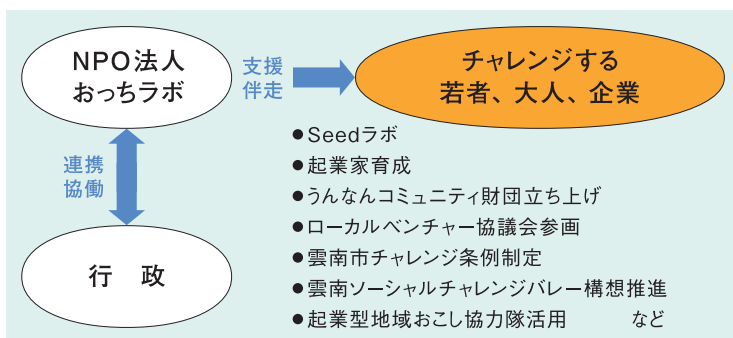
しろみ けい
NPO法人 農家のこせがれネットワーク 理事(当時) **銀鏡 佳**さん

「持続可能な生態系」をイメージして取り組んだ

雲南市は過疎化への危機意識が強く、地域自主組織で住民が主体的に活動する風土がすでに育まれていました。NPO法人おっちラボが設立されたことで、そこにチャレンジする若い人材が加わり、応援し合う風土が強まったように感じます。幸雲南塾の塾生は、社会人もいれば大学生もいて、それぞれにどう関わってもらおうか苦心しましたね。一番の課題と考えていたのは、常駐スタッフの確保と育成、そして資金の確保。私がずっと関わられるわけではないので、「持続可能な生態系」をつくることをイメージしながら取り組みました。地域の方に繋いでくれたり、調整をしてくれたり、市の担当職員の方もとても熱心に支援・伴走してくださり、今でも感謝しています。矢田さんとは、自宅にお邪魔して子どもたちのご飯を作ったりしながら、夜な夜な打ち合わせをしました。良い思い出がたくさんあります。

地域再生マネージャー事業 終了後の取り組み (2014年度以降)

事業実施体制



市とNPO法人おっちラボが継続して連携。「チャレンジ」というキーワードをより鮮明に打ち出し、幅広い世代の挑戦を後押ししている。幸雲南塾は「Seedラボ」と名称を変え、起業支援や共創案件創出を推進している。

事業実施内容

●「株式会社 Community Care」の創業

What — 何をしたのか?

幸雲南塾の5期生だった中澤 ちひろさんが2015年度に株式会社Community Care (通称コミケア) を設立した。

How — どのようにしたのか?

●おっちラボ傘下で事業開始

地域医療に興味をもっていた中澤さんは矢田さんとの出会いを機に幸雲南塾に参加。2015年度にまずNPO法人おっちラボの事業部として訪問看護を始め、収益性を担保できるようになった2015年度の会社化に伴い、代表に就任した。事務所は2015年11月に開設された、交流スペースやキッチンを備えた「みとや世代間交流施設ほほ笑み」内に設けた。

「塾やおっちラボに対して『何をやっているのかよく分からない』』といった声があった中で、成果の分かりやすいコミケアが誕生したことは大きな出来事でした。えこ最良との批判もありましたが、公益性のある事業として支援しました」(鳥谷さん)

「人口減少が進む中山間地域で訪問看護事業を成り立たせるといったチャレンジでした。サロンなどの地域活動を通して、医療や看護が必要になる前から住民と交流する活動も同時に展開してきました」(中澤さん)

● おっちラボが若者のチャレンジを促す新たな取り組みを続々と

What — 何をしたのか？

NPO 法人おっちラボが市と連携しながら、さまざまな新しい取り組みを牽引してきた。

How — どのようにしたのか？

● 起業支援の取り組み

株式会社 Community Care の設立をひとつの契機に、おっちラボの取り組みは起業支援に重点を置く方向にシフトした。2017 年度にはローカルベンチャー人材の輩出・育成を担う「ローカルベンチャー協議会」に雲南市と一緒に参画。協議会が東京都内で開催するローカル起業塾と連携するなど、新たな展開に繋がっている。

ふるさと納税の寄付金を財源に中高生・大学生・若者のチャレンジを資金的にも支援する「雲南スペシャルチャレンジ制度」、挑戦する人を地域住民が気楽に寄付などで応援できる仕組みとして誕生した「うなんコミュニティ財団」(2020年4月設立)など、さまざまな取り組みを牽引してきた。おっちラボの事務所は現在、同財団が運営するコワーキングスペース「三日市ラボ」に移転している。

● 幸雲南塾を「Seedラボ」に発展的改組

幸雲南塾の起業支援への取り組みを引き継ぎながら、名称を「Seed ラボ」に変更。「里山ツーリズム」「街並みデザイン」「農と関係人口」などテーマを絞った7つのゼミを開催し、持続可能な地域づくりを目標に活動している。

「集まって講義を聞くだけでは、本当の学びにはなりにくいと感じていました。そこで、チャレンジの実践をしている仲間と一緒に、時に現場に出ながら、新たな実践を学び合うかたちに変えたんです。どうすればより深い学びを実践できるか、地域でチャレンジする人をもっと増やしていけるか、今も試行錯誤しています」(小俣さん)

主な成果

● 雲南から未来へ、挑戦を繋ぐ人々

市と民間とが連携し、チャレンジを後押しする取り組みを10年以上続けてきた結果、60を下らない新規事業が誕生するなど、着実に成果を挙げてきた。NPO 法人おっちラボ初代代表である矢田さんは、2017年3月にコミュニティナーシングの社会実装に取り組み株式会社 CNC を立ち上げ、その事業を全国・海外で展開しながら、現在も本社を雲南市に置き、地域の取り組みに関わり続けている。その意思を受け継いだ2代目代表の小俣さんも新たな試みを牽引し、今では地域に欠かせないキーパーソンだ。過疎という言葉が生まれた島根県の中山間地域で、人口減少は依然として深刻ではあるが、バトンを未来へと繋ごうとする動きはさらに強まっている。「今後10年の課題は、これまでの取り組みをもっと混ぜ合わせて、多世代・多セクターと一緒にチャレンジする状態をどう生み出せるかです。日本の未来を良くしていくための探究を、この地で続けていきたいですね」(小俣さん)



「うなんコミュニティ財団」のオフィス。

自治体コメント



雲南市 政策企画部 政策推進課 鳥谷 健二さん

挑戦の気風が文化として根付いた

事業開始前のあるビジネスプランコンテストを見て、集まっている若者たちの熱量に魅せられました。こういう若者を雲南にも増やしたいと思って始めたのが幸雲南塾です。雲南市は中山間地域にあり、いわば農耕民たちのまち。外から次々に新しい人を呼ぶよりも、種を蒔いて、しっかり育てる方が合うと思っていたし、それは間違っていないでしたね。2019年度には雲南市チャレンジ推進条例も施行され、挑戦の気風は地域の文化として根付いたと思います。

取り組みのプロセス



マネージャー事業実施期間中

1年目 (2013年度)

地域課題解決に取り組む若手の人材を発掘・育成することが喫緊の課題だった。市主導で動いていた地域プロデューサー養成講座「幸雲南塾」が中間支援組織によって自立自走していく体制構築を目指した。

- 多様な人材を巻き込むために交流会などを開催。他の自治体での先行事例の視察も実施。
- 事前の根回し、問題発生時のお詫びなど、幸雲南塾のヒアリング調査を後方から支援した。

- 幸雲南塾生の矢田さんがおっちラボ代表に就任。塾生らを牽引する体制が整った。
- 任意団体を経て中間支援組織NPO法人おっちラボを設立。のちの多様な取り組みの礎になった。

- 3期までの幸雲南塾で計35人の塾生を輩出。彼ら彼女らがその後の多様な取り組みの中心になっていった。
- 市の運営だった幸雲南塾の運営をおっちラボに委託。本格的に民間の知見や実践知を学べる場へと進化した。

成果に繋がったポイント

- 地域再生マネージャーの銀鏡さん関わった民間のプレイヤーがはっきりと物申すタイプの人たちだった。
- 官と民とが密に連携することの重要性を認識し、定期的に現状と課題を共有しながら進めた。

マネージャー事業終了後

2年目 (2014年度)

新設されたおっちラボの事業が本格的に動き出す中、矢田さんの周辺にいた若者たちが訪問看護事業への挑戦を始めた。地域のより良い未来に繋がる大きな一歩だと捉え、ラボも市も最大限の支援を実施した。

- 新設されたおっちラボメンバーと定例会議を開き、現状や課題のすり合わせ・共有に努めた。
- 幸雲南塾の塾生に伴走したり、地域住民を紹介して繋いだりするなど、引き続き後方支援した。

- 幸雲南塾を「地域プロデューサー養成講座」から「若者チャレンジ講座」に名称変更。
- 塾生による活動に触発され、中澤さんをはじめとする人材が集まり、訪問看護事業実現の機運が高まった。

- 矢田さんが塾長を務める体制のもと、幸雲南塾でこれまで以上に実践的な学びが実施された。
- 塾生によって地域住民にとってもインパクトの大きい訪問看護事業の取り組みが動きはじめた。

できたばかりのおっちラボと地域住民らとを繋ぐ役割を、市担当者が意識的に担った。

3年目 (2015年度)

幸雲南塾生による訪問看護事業のチャレンジが成功し、株式会社 Community Care が設立された。地域における幸雲南塾への評価が高まったことが、より起業支援の方向にシフトしていくひとつの契機にもなった。

- コミケア設立の前段階で地方創生交付金を人件費として活用し、メンバーらの生活を保障した。
- 幸雲南塾の自立・自走を視野に、補助的な支援を継続。おっちラボとの定例会議も続けた。

- 都内で弁護士をしていた小俣さんを含む3人のコーディネーターがおっちラボに参画。移住した小俣さんがのちに代表となる。
- 中澤さんが5期生として幸雲南塾を受講。
- おっちラボの事業部という形態を経て中澤さんが株式会社 Community Care を設立。
- おっちラボが会議体「チャレンジ創生プロジェクトチーム」に参画。

- 中澤さんらによる訪問看護事業の事業化が成功し、幸雲南塾としても大きな成果となった。
- 「チャレンジ創生プロジェクトチーム」参画によって政策づくりにも関わるようになり、若者支援の新たな取り組みが生まれた。

- 市が訪問看護事業のチャレンジに公益性を見出し、地方創生交付金を活用するなどの支援に踏み切った。
- 試行錯誤しながら地道に取り組んできた幸雲南塾の試みが、訪問看護事業という形で結実した。
- 市とおっちラボが定期的な現状と課題の共有を続けてきたため、重要局面で共に動くことができた。

4年目 (2016年度) 以降

地道な取り組みが実を結び、おっちラボが順調に成果を上げた。そうした中でさらなる起業支援の充実に向け、「ローカルベンチャー協議会」とのパートナーシップ形成などを進めた。

おっちラボ、幸雲南塾が自走フェーズに移行し、市は「良き伴走者」としての役割に徹した。

- ラボが市から支援される対象ではなく、対等なプレイヤーとして連携するようになった。
- 2017年度からのローカルベンチャー協議会との連携に向けて、おっちラボが準備を開始した。

- おっちラボの人材も充実し、幸雲南塾修了生からさまざまな新規事業が生まれるなど順調に成果を上げた。
- 支援を継続するとともに、他団体との連携を深め、チャレンジの生まれやすい土壌を定着させた。

- この間の成功事例で充足して足を止めることなく、持続・発展していく支援体制を目指した。
- 魅力的な施策が優秀な人材を呼び込み、その人材が別の人材を呼び込むという好循環が生まれた。

2024年度までの実績

おっちラボが関わって、60を下らない新規事業が創出された。また、2024年度ではおっちラボが4つのプロジェクトを実施した。①雲南市チャレンジ条例に基づき地域課題解決に取り組む若者を支援する「スペシャルチャレンジ・ホープ伴走支援」では、相談者10人のうち3人が申請に至り「米の付加価値」「情報発信」「シニアのWell-being」の分野で事業拡大及び起業を行った。②「Seedラボ」は6つのゼミで計41回の場を設け、延べ266人が参加。チャレンジャー同士の関係構築、ゼミ間連携によるプロジェクト創出が起きている。③「起業型地域おこし協力隊募集」では1人を採択。④「ローカルベンチャー協議会」では里山ツーリズム協議会の設立と関係者の巻き込みが進展した。